

5月18日の研修で説明したように、みなさんはこれまでの自分自身を振り返り、目的意識に根差したビジョンを描いたことと思います。そして、それぞれの学校のビジョンと照らし合わせてチーム学習のテーマを設定し、チームを立ち上げ、実践を始めていることでしょう。

ところで、みなさんの研修の中心課題は、**想いをもって人と人をつなげるコーディネーター役を果たす**ことです。その実践を記録することが教員としての知の伝承と生成につながります。

今回は、「ミドルリーダー養成研修 研修の手引き」のP.4 様式2【実践記録】の中の「2（2）取組みの経過」を記述する際の留意点について説明します。

1 物語を語るように、読み手を意識して実践を記録する

テーマを設定するところから始めて、アクション・ラーニングとして3つ以上の実践を記録してください。みなさんが迷ったり失敗したりした経験が後の人々の役に立ちます。成果を出すためにいかに苦労したかを、リアルに伝えるために物語として、読み手を意識して記述してください。

2 対話を記述するなど、実践の様子を具体的に記載する

次の例をご覧ください。

授業研究をテーマにしたチームが、公開授業を決めようとしている場面です。Aは受講者。BはAと同学年の担任。Cは経験豊かな授業名人です。チームはこの3名がコアメンバーです。Aは秋に授業を公開することにし、単元のどの部分を公開するか、コアメンバーに相談しました。そのときの対話です。

A：秋の公開授業について、昨年Iさんが公開したこの授業をやろうかと思うのです。グループ活動も活発で見ごたえのある授業でしたから。

B：私も参観しました。確かに盛り上がっていましたが、なんというか活動的なだけだったような気がします。

C：そうですね、単元の中ほどということもあり意見はいろいろ出ていましたが、深く考えるようなテーマを設定することができていなかったような気がします。本校が目指す資質・能力を育成するには適していないかもしれませんね。

A：そうですか。それではもう一度Bさんと考え直してみます。

この例のように、公開授業について決定した結果だけを記述するのではなく、メンバーとの対話を記録することで、自分の実践の中で取り上げなかったものをなぜ選ばなかったのかを説明することになります。読み手はそれらの場面を追体験することで、様々な判断の重なりを理解し、知の生成を共有することができます。すべての出来事を記述することは無理ですが、研究実践で重要だと考えられるところは丁寧に記述し、読む人が臨場感をもって読むことができるように工夫してください。

3 サッカーの試合のハイライトシーンのように記述する

アクション・ラーニングは単独の出来事ではなく、いくつかの出来事の重なりです。2の例のように、公開する授業を決める時にも、話し合いを重ねアイデアを出して改善していくという過程を踏みます。その様子を記録するにあたり、先日のワールドカップのサッカーの試合を伝えるニュースが参考になります。試合の内容をよりよく伝えるためにニュースではハイライトシーンを数分にまとめます。試合の開始シーンに始まり、見せ場となるシュートの場面を中心に編成されます。いろいろな角度から、なぜゴールが生まれたか、なぜゴールが外れたのかがわかりやすく編集されます。このように見せ場を持ちながら全体を見通すことができるように工夫してください。

最後に、今回まとめる実践記録が単なる事実の羅列に終わるのではなく、自分のステップアップの軌跡であり、さらには、他の教員の参考になるものになることを期待しています。